

繊維製品における資源循環システム検討会 これまでの議論の整理

1. 「故衣料品の『回収』」に関する現状と課題

- ・ 故衣料品の回収は、自治体による資源回収とアパレル企業等による店頭回収が主流である。
- ・ 自治体による布類の資源回収は、回収・分別を行う事業者が近隣に存在しないため、実施できていない自治体もあり、現状では、人口ベースで約 6 割の自治体で実施している。
- ・ アパレル企業等による、故衣料品の店頭回収も広がっているが、自社ブランドに限る企業が多い。
- ・ 繊維製品の資源循環に関する生活者の意識も高まりつつあるものの、便利な資源回収場所が近隣に存在しないため、ゴミとして廃棄されることが多くなっていると考えられる。
- ・ 生活者が、故衣料品を資源ではなく、ゴミとして廃棄するのは、上述の課題に加えて、回収後の衣類の取り扱いに関する、情報の開示が十分にされていないことによる不信感も、理由の一つと考えられる。

2. 「回収した故衣料品の『分別・再生』」に関する現状と課題

- ・ 回収した故衣料品は、国内や海外での古着市場でのリユース向けなどランクに応じた分別や、工業用雑巾に適したものや、自動車用産業資材向けに適したものなど、素材別の分別を全て手作業で行われている。自動選別技術の開発など、作業を効率化することが必要。
- ・ 故衣料品から、化学的な処理を行い、繊維を再生する技術については、一部の単一素材でのみ実現している。しかしながら、商用化に向けては、再生した繊維の品質向上や、再生にかかるコストの低減などが必要。物理的な処理によって繊維を再生する技術に関しても、品質や耐久性などの課題があり、いずれの手法においても技術の高度化が必要。
- ・ 複合素材繊維（混紡品）を化学的にそのまま再生することは困難であり、素材毎に分離する技術の開発が必要。

3. 故衣料品からリサイクルされた製品の「製造」段階における課題

- ・ ボタンやファスナーなどの副資材への対応もコスト要因になることから、分解しやすい設計などが求められる。
- ・ 繊維製品のリサイクルのしやすさ（ボタンやファスナーなどの副資材への対応）、温室効果ガスの排出抑制、省エネルギー対策、有害物質使用の最小化等の環境に配慮した製品設計のニーズが高まっている。
- ・ 「リサイクル繊維」の定義や商品表示のルール、組成の評価方法が未整備の状況であるため、製造段階での制度整備が必要。
- ・ 「リサイクル繊維」をどの程度使っているかは、各社独自の基準・方法（商品への直接印字や、商品の下げ札）で表記されている。
- ・ バージン素材とリサイクル素材の評価方法が確立していないため、ブロックチェーンの活用や、認証制度などを用いたグリーンウォッシュ対策の整備が必要。

4. 故衣料品からリサイクルされた製品の「販売」段階における課題

- ・ 現在の衣料品の組成等にかかる表記ルールは、家庭用品品質表示法によって消費者の肌に触れるものが安全であることを確認できるようにする観点で洗濯タグ（品質表示）ルールが整備されているため、リサイクル繊維かどうかは表記することができない。
- ・ 一般的には工程が増えるため、リサイクル繊維を活用した衣類のコストはバージン素材を活用しているものに比べ高コスト。
- ・ コスト低減に向けた技術開発等の取組も重要であるが、効果的なラベリングにより生活者の理解を得て、行動変容を促していくことが不可欠。